

内科・糖尿病内科

担当医師 井口昭久教授

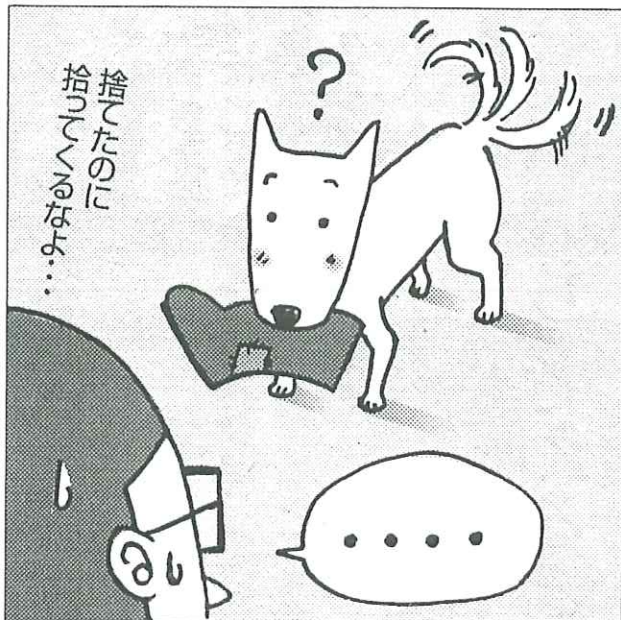
の記事が掲載されました。

9月5日 朝日新聞 朝刊

(毎月1回掲載中)

老年学

融通利かぬカメラ



ビデオカメラを買った。最近のビデオは、撮影した後で映像を編集できる。思い出したくないシーンや退屈な画像は消去できる。楽しかった場面や、美しい風景だけを再生して楽しむことができる。私たちの記憶装置もそのように編集できればよいのだが、残念ながら脳に持っている機器は編集不可能な融通の利かないタイプである。我々の「カメラ」は撮影したくない場面でも意地悪く撮っている。「保存するな」という命令も

愛知淑徳大学教授
医師

井口 昭久

無視する。あのことについてはきれいさっぱり忘れたい、と願ってもしつこく再生される。思い出さうとしなくても思い出したくない場面が不意に現れる。

捨てたはずの記憶が夜になると現れて眠れなくなる。19世紀のイギリスの心理学者ゴールトン(1822~1911)は我々の記憶装置について、「捨てたばかりのものを拾ってきてはうれしそうにしっぽを振る犬のようだ」と述べている。

過去の日常は、愉快と不愉快が混在していたはずなのに、気分の悪い時に限って、不愉快であった時の記憶がよみがえる。壊れたレコード盤が同じ旋律を繰り返すように何回でも現れる。

反対に、このことは絶対に覚えておこうと思っても2日もたつと思い出せない。ただ時には、古くなった装置が共鳴して、「あの時は楽しかったね」と、老夫婦に同じ場面を提供したりする。